

【実践報告】

「学校栄養教育実習Ⅱ」の報告

広島文教大学人間科学部人間栄養学科

准教授 山 本 妃奈子

1 はじめに

栄養教諭一種免許状の取得を希望する教職課程履修学生を対象とした教育実習は、授業科目「学校栄養教育実習Ⅱ」に含まれる。本実習の目的は、栄養教諭としての使命感を自覚し、職務内容について理解を深め、教育に関する資質と栄養に関する専門性を実践的に育成することである。実習は義務教育諸学校において実施し、実習内容は栄養教諭として修得すべき専門知識・技術に関する内容を中心としている。

2 実施のスケジュール

時 期	主な内容
4月～5月 事前学習 (学内)	<ul style="list-style-type: none">・本実習の意義、目的、心構え等を再確認する。・実習校への事前訪問により、実習校の学校教育目標を含む食に関する指導の全体計画や児童の実態、実習の事前課題について確認する。・実習校より出された課題について、授業等における食に関する指導の学習指導案の作成や指導媒体作成、給食指導の各種資料・媒体作成等を行う。・学内での模擬授業等を重ね、学科担当教員より指導を受けながら学生間で相互評価し、よりよい授業・教材になるよう工夫を重ねる。
6月～7月 本実習 (学外) 5日間	<ul style="list-style-type: none">・実習の内容は実習校により計画される。主な内容として、①指導教諭等からの学校・学級経営の説明、②児童及び生徒への個別的な相談・指導の実習、③児童及び生徒への教科・特別活動における指導の実習、④食に関する指導の連携・調整の実習 が挙げられる。・実習期間中は実習内容や自己課題などを教育実習日誌等へ記録することにより、日々省察し栄養教諭の役割・業務等の実際について理解を深める。
8月～9月 事後学習 (学内)	<ul style="list-style-type: none">・各自が実習を振り返り、記録をまとめる。・実習校ごとに研究授業や給食指導をはじめとした実習内容や与えられた課題への取組を通して学んだことについて報告書にまとめる。また、全ての実習校の学習指導案を取りまとめた『学習指導案集』を作成する。・9/21に報告会を実施し、報告書にまとめた内容をもとに報告するとともに、研究授業の紹介を模擬授業として行い、栄養教諭を目指す下級生の資質向上にもつなげる。 <p>※オープンキャンパスにおいて、本学を目指す高校生に研究授業内容をもとにした模擬授業を実施</p>

3 活動の概要

(1) 研究授業の題目等（学生の報告資料より抜粋）

学年・教科	題目	ねらい
小学3年生 【特別活動】 TT形式	赤・黄・緑の3色の食べものを知ろう	3色の食品のグループ分けを理解し、好き嫌いせず健康的なからだをつくらうとする意欲を持つ。 食育の視点：心身の健康、食品を選択する能力

小学6年生 【特別活動】 TT形式	朝ごはんは野菜を食べよう	野菜について学び、朝ごはんですすんで野菜を食べる意欲を育てる。 食育の視点：心身の健康
小学6年生 【特別活動】 TT形式	バランスの良い朝食を考えよう	朝食のもつ役割と五栄養素の振り返りを通して、朝食の働きについて理解し、栄養バランスの良い朝食を食べようとする意欲を高める。 食育の視点：食事の重要性、食品を選択する能力
中学1年生 【総合的な学習の時間】 TT形式	朝食はみんなのスーパーヒーロー	朝食の役割と大切さを理解する。 望ましい朝食のとり方について、各自改善策を考える 食育の視点：心身の健康
	朝食の栄養バランスについて考えよう	朝食をバランスよく食べたいと思う意欲を持つ。 食育の視点：食事の重要性、食品を選択する能力

(2) 教育実習を通して学んだこと（学生の報告資料より抜粋）

- ・栄養教諭は児童と関わる時間が限られているため、休憩時間や給食時間などに積極的に関わり、児童・生徒の実態把握をすることが大切である。
- ・学級担任や教科担当教諭と事前に情報を共有することが重要である。
- ・予測していない質問に答えられるように、幅広い知識を持つことが大切である。
- ・学校給食を教材としてどの教科にもつなげることができるよう学級担任に調査しながら授業内容を考えることが重要である。
- ・栄養教諭による指導の機会が限られる中で、担任教諭の授業内容と関連付けた指導を行い学習内容の定着を図るため、十分な連携が必要である。
- ・ICTをはじめとした教育媒体を十分に活用し、深い学びにつなげることが大切である。
- ・生徒は教師の行動や発言をよく見ているため、責任感をもって行動や発言することが大切である。

4 成果と課題

今年度も実習校の多大なるご尽力により予定どおり教育実習を修了することができた。

教育実習で学んだこととして学生が共通して挙げていたことは、教科等による食に関する指導をより効果的なものとするためには、「様々な機会を捉えて児童・生徒と積極的に関わることや日々の給食の残食状況による実態把握」と「担任教諭等との綿密な事前打合せによる連携調整」の重要性であった。クラスごとで異なる児童・生徒の反応や意見に戸惑いながらも実践により得た学びは、大学での理論的な学びや模擬授業では得られない貴重な学びとなり、学生にとって大きな財産となった。特に今年度は、中学校での実習もあり、義務教育の9年間での体系的な食に関する指導の実感を体得することができ、貴重な学びを得ることができた。実習内容を報告書にまとめ、教育実習報告会において報告することによって学びを深化することができたようである。また、報告会後には下級生との情報交換会を行い、先輩から後輩へと教育実習での学びを引き継ぐことができた。こうした異学年交流の機会を活用し、学生の学びのモチベーションを向上していくことも重要だと考える。

次年度も実り多き実習とするため、計画的に実習準備を進めることや実習先の指導教員との意思疎通を十分に図るなど、学生の自発的な取組を促していきたい。児童生徒の食の自己管理能力の涵養に貢献できるよう、学生が今後も探求心・好奇心をもって楽しみながら「食の視点」を拡げること尽力してもらいたい。